

宍道町埋蔵文化財調査報告5

隨音寺横穴群発掘調査報告書

1986年3月

島根県宍道町教育委員会

宍道町埋蔵文化財調査報告5

隨音寺横穴郡発掘調査報告書



宍道町位置図

1986年3月

島根県宍道町教育委員会

序

本書は、かねてから計画中の歴史民俗資料館の建設に伴ない、昭和60年4月15日から4月26日にかけて行った隨音寺横穴群発掘調査の報告書である。

当町における横穴群としては、才横穴群など約40穴の横穴が発見されており、なかでも岩盤に掘り込んだ横穴としては、観音寺横穴、小松横穴群とともに数少ない貴重なものとなった。

もともと当横穴群は横穴としての認識ではなく籠やぶの中にあって古くから付近の住民の生産物の貯蔵場所として使われたり、子供達の格好の遊び場となっていたもので、遺物らしいものは少なく僅かに須恵器の蓋1個と閉塞石の1部とみられるものが残っていた。しかし、第1号穴や第2号穴ともに歴史民俗資料館の北側の斜面に位置し、はっきりとその形をあらわしているため、資料館見学の機会に遺跡にじかにふれて、関心を深める意味においてもその意義がある。

今後本町横穴群等に対する調査研究を深めると共にこれらをとおして埋蔵文化財に対する一層の理解と関心を深めたいと考えている。

なお、発掘調査に当たり熱心なご助言をいただいた島根県教育庁文化課に対し心から謝意を表するものである。

昭和61年3月

宍道町教育委員会

教育長 山田鶴一

例 言

1. 本書は穴道町歴史民俗資料館の建設に先立って穴道町教育委員会が実施した隨音寺横穴群発掘調査の報告書である。

2. 調査費用は穴道町の負担による。

3. 調査体制

事務局 野村泰久(教育委員会教育次長)

坂本美代子(〃主任主事)

庄司英夫(〃主任主事)

高木聰(〃主事)

調査員 稲田信(〃主事補)

調査補助員 青木昭夫

4. 調査にあたっては島根県教育委員会文化課の指導と役場建設課の協力を得た。

5. 本書の執筆、編集は稻田がおこなった。

6. 遺物、記録は穴道町教育委員会で保管している。

目 次

序	
I 調査にいたる経過	2
II 位置と歴史的環境	2
III 遺跡の概要	4
1. 1号穴	5
2. 2号穴	6
N 周辺の類例	
観音寺横穴群	10
V 小 結	12

挿 図 目 次

図1 隨音寺横穴群と周辺の遺跡	3
図2 横穴群位置図	4
図3 1号穴閉塞石実測図	5
図4 1号穴出土遺物実測図	6
図5 隨音寺1号穴実測図	7
図6 隨音寺2号穴実測図	9
図7 駿音寺横穴実測図	11

図 版 目 次

図版 1	13
図版 2	14
図版 3	15
図版 4	16
図版 5	17
図版 6	18

I 調査の経過

昭和60年3月、穴道町歴史民俗資料館の建設に先立って穴道町教育委員会では遺跡の有無を確認するため、予定地の分布調査を行った。この調査で岩盤に穿たれた2穴の横穴墓が開口した状況で発見された。横穴墓はさらに発見される可能性も強く、また文化遺産を保存する民俗資料館の性格上、記録、保存をめぐっての内部検討が必要であるため、資料を得るために発掘調査を急ぎ行うこととした。同年4月4日付で発見通知書を、4月10日付で発掘通知書を提出している。

横穴群は地名をとって隨音寺横穴群とし、南側のものを1号穴、北側のものを2号穴とした。1号穴は整正家形平入のもので、岩盤に掘り込んだために馬形を良くとどめたものであった。2号穴は断面三角形平入のもので、1号穴と同様、岩盤に掘り込んでいるが、昔より子供の遊び場や生産物の貯蔵等が行われていたため前壁部から陥没にかけてすでに崩壊している。

調査は1号穴、2号穴と進め、最後に周囲の確認調査を行った。1号穴は既に盗掘を受けており遺物はほとんどみられなかったが、前庭部に閉塞石の一部、須恵器の蓋1個が見つかっている。2号穴も同様に盗掘を受けており、遺物は残っていなかった。確認のために、横穴周囲の斜面、谷底の平坦面にトレーニングを設定して調査を行ったが、横穴2穴を除いての発見はなかった。

II 位置と歴史的環境

隨音寺横穴群は2穴からなる横穴群で穴道町大字穴道1,715番地に所在し、穴道町歴史民俗資料館に隣接して開口する。穴道湖南西岸より約1.5km南にのびる才の谷は古くより集落が営まれていたと想われ、この谷が基盤と考えられる水滸古墳群、清水谷遺跡、矢頭遺跡、才横穴群が周囲に分布する。隨音寺横穴群のある谷は、この才の谷の入口付近から西に向かって延びるもので、幅50m、長さ300mの規模をもつ。谷の上半分は町指定文化財木幡山荘が占めており、横穴墓は谷の入口より約70m入った地点の南側くぼ地に2穴並んで開口する。南側のものを1号穴、北側のものを2号穴とした。

地質図にみると横穴群は来待石（粗粒塊状砂岩）の分布する地帯に位置するが、民俗資料館に伴う地質調査によると横穴墓の穿たれた岩盤は安山岩質火砕岩との結果がでている。

穴道町では穴道湖にそぐ小河川とそれによって形成された谷平野を中心として集落が営まれており、大平野とそれに伴う大集落はみられない。この状況は古代においても同様で、谷を単位とした生活が行われていたと考えられる。鏡川の流れる鏡の谷、弘長寺川の流れる弘長寺の谷、来待川の流れる久戸、内ヶ峰の谷、同道川の流れる白石の谷、才川の流れる才の谷、佐々布川の流れる佐々布の谷などがあり、以下に述べる遺跡もそれを中心として分布する。

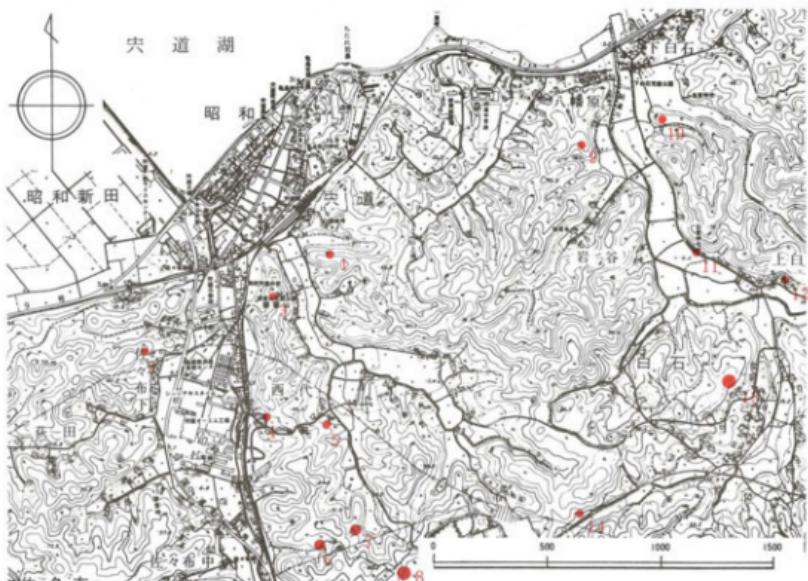
^{注3} 穴道町で確認されている最古の遺跡は縄文時代にさかのぼり弘長寺の弘長寺遺跡、同じく三成遺跡、

伊野谷の伊野谷遺跡がそれにあたる。いずれも宍道湖岸に分布する遺跡である。

弥生時代の遺跡として弘長寺の三成遺跡、佐々布の平田遺跡、才の清水谷2号墓^{注4}、坂口の矢頭遺跡^{注5}がみられる。縄文時代、弥生時代の遺跡の発見例は少なく、明確なことは言えないが、遺跡の分布は宍道湖の漁撈による縄文時代より農耕を基盤とする弥生時代への変化をうかがわせる。

古墳時代になると遺跡数は約90を数えるが、その多くは古墳時代後期のものと考えられる。前半期の遺跡として萩田の足頭古墳群があり、特に2号墳は主体部に石棺をもつものであった。後期になると各地に石室墳、横穴墓がみられる。石室をもつ古墳として、鏡の鏡北墳、白石の伊賀見1号墳^{注6}、椎山1号墳^{注7}、下の空古墳^{注8}があり、そのうち椎山1号墳を除いては「石棺式石室」と呼ばれる類のものである。横穴墓は金銅装太刀を出土した松石横穴をはじめ、菅原横穴群、小松横穴群、才横穴群、観音寺横穴など約40穴の横穴墓が町内全域より発見されている。特に小松横穴群、観音寺横穴は今回の調査例同様、岩盤に掘り込んだ横穴墓である。

律令時代になると「出雲国風土記」にその様相を知り得るもので、宍道町は健部郷、拜志郷の一部^{注9}と宍道郷より成っており、今の宍道町大字佐々布付近には宍道駅が置かれていたことが知られている。



1 隨音寺横穴群 2 観音寺横穴 3 宍道要害山 4 O M 横穴 5 才横穴群 6 矢頭遺跡 7 清水谷跡
8 水溜古墳群 9 伊野谷遺跡 10 伊賀見古墳群 11 石宮神社 12 下の空古墳 13 椎山古墳群 14 女ノ岬横穴

図1 隨音寺横穴群と周辺の遺跡

III 遺跡の概要

調査は2穴の横穴と周囲の遺跡確認を行ったもので昭和60年4月15日より同26日までの10日間を要した。横穴は安山岩質火砕岩の岩盤に掘り込んだもので、周囲も30~40cmの表土が覆っているものの、岩山となっている。

1号穴はすでに開口した横穴で、古くより子供の遊び場になっていたという。羨道部から前庭部にかけては10~30cmの流土がたまつておらず、その搬出を行った。玄室内より遺物類は発見されず、羨道部より閉塞石の一部と須恵器の蓋1個が出土している。

2号穴もすでに開口しており、玄門部より前方にかけては大きく崩れている。土砂の流入はなく、遺物も発見されず実測調査をするにとどまった。

周囲の確認調査は、横穴に近い斜面に縦トレンチを設定して行った。また谷底の平坦面にもトレンチを設定し調査したが、いずれの地点よりも遺跡は見つかっていない。



図2 横穴群位置図

1号穴

1号穴は踏査によって発見されたもので、人が十分に入り出しができるほど開口していた。安山岩質火砕岩に掘り込まれたもので、横穴墓としての認識はなかったが古くより知られていたものだという。流土は羨道部より前庭部にかけて1.0～3.0cm程みられたが、玄室内ではそのまま床面が露出していた。流土は黒褐色の単層で追葬などの確認はなされていない。

玄室はほぼ長方形で中くぼみの床面形を示し、標高1.2m、中心の軸はE-23°-Nを示す。床面の奥行は北側で1.8m、南側で1.5m、幅は奥壁で1.95m、側壁で2.0mを示し長方形とはいながら、やや不整形である。天井形態は整正家形平入で、壁部と天井部との間に明確な界をもつものである。床面より界線までの高さは0.7～0.8mで棟線までの高さは1.2～1.3m、棟線は長さ0.9mを測る。各壁は床面から界線にかけてやや内傾し、天井の各壁はやや内湾して棟線にのびる。床面の中心に直径3.5cm、深さ5cmを測る円形の落ち込みがみられるが、横穴に付設するものか、後世の加工であるかは不明である。

羨道は床面で長さ0.7m、幅0.9～1.0m、高さ0.9～0.95mを図る。床面は前庭部にむかってやや広がりながら下がっていく。南側は北側に比べて下り方が大きい。正面断面をみると両壁は床上約0.1mまで大きく広がり、そこから天井に向かって徐々に傾き、天井平坦面をつくる。中央部に横長のくぼみがあるが不明である。

羨道から前庭にかけての床面は、閉塞施設の一部とおもわれるゆるやかな段をもちらしながら大きく広がる。羨道の先端幅1.0m、ゆるやかな段の間1.2m、広がった部分1.35mを図る。ゆるやかな段は床面より2.0～3.0cmなど上のびた後、平坦な面になって消える。広がった部分の床面をみると北側が鋭角に、南側が鈍角になっており、縫線は明瞭に奥に傾きながら外に広がって7.0～8.0cmほど上のびる。羨道先端から床面は一段ほどゆるやかに下るが、閉塞用施設の一部であろう。

前庭部より閉塞用石の破片5個が出土している。そのうち2個は羨道を閉塞した右の一部とおもわれ、復元してみると長さ約0.9m、幅0.4m、厚さ0.11mで、このような閉塞石2～3枚を利用して閉塞の用に足していたのであろう。残りの3個の石については不明だが、閉塞石の抑え石の可能性を考える。

前庭部の床面は羨道先端から大きく広がる。羨道部側の幅1.35m、そこから1.6mほど広がりながらのびて、幅1.5mを測り、先は崖になって垂直におちていく。前庭部には1.0～3.0cmほどの流土がみられたが、木の根などが入り込んでいたため、土層の観察はできなかった。

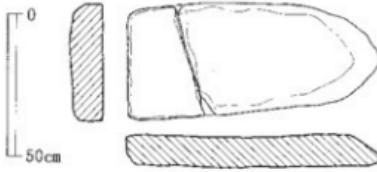


図3 1号穴閉塞石実測図

この流土を取り除くと、閉塞用の石と須恵器の蓋1個が出土している。

遺物は閉塞石に接して須恵器の蓋が1個出土している。これは口径14.2cmを測る蓋で口縁部にかえりを、天井部に輪状のつまみをもつものである。天井部は回転ヘラケ

ズリを施した後、輪状つまみをつけたもので

ある。須恵器としては出雲國守綱半^{注13}式、御浦編年^{注14}式に含めうるものであり、古墳時代後期のものであるが、横穴墓築造期に伴うものかは不明である。

岩盤に掘り込まれた横穴墓であるため、一部の剥落はあるものの、加工痕がよく残っている。閉塞部分にはノミ状のT工具を用いたとおもわれる加工痕がよくみられ、幅約5cmなどのものが観察できる。玄室内にはノミ痕の他に1~2cmの梢円形の刺突痕が点々とみられ、荒掘り用工具の加工痕とも考えられる。^{注15}

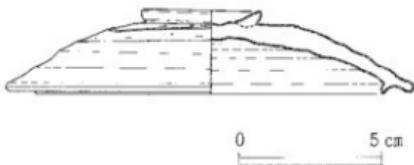


図4 1号穴出土遺物実測図

2 号 穴

1号穴と同様、踏査によって発見されたもので、1号穴の4m北に位置する。これも安山岩質火砕岩に掘り込まれたもので古くより開口しており、羨道部より前は破壊されていた。内部には木の根などが強っていたが流土などはみられなかった。

玄室は長方形の床面を示し、標高は7.5m、中心の軸はE-13°-Sを示す。床面をみると羨道部分の崩壊が著しいため、明確なことは言えないが、北側の奥行約1.8m、南側の奥行約1.65m、奥壁の幅1.7m、前壁の幅約2mを測り、開口方向にやや広がるようなプランをもつ。天井にも剥落がみられる。形態は天井部と壁の間にややクッションを置くが、界線はなく、三角形断面平入の範囲に含まれるものと考える。床面より天井練線までの高さ1.4m、練線の長さ0.9mを測る。各壁は床面より約0.9~1mほど内傾しながら天井に向かってのび、界線はないものの、そこより大きく内消しながら練線までのびる。

羨道は破壊されており不明な点が多いが、床面をみると加工の一部が残っており、長さ約0.55m、幅約0.8mを測る。高さは約0.9m前後である。

前庭部も破壊されているが、床面に羨道先端の加工痕を残しており、羨道部から大きく広がる地点の幅1.0mを測る。

遺物については開口が古いため、不明である。

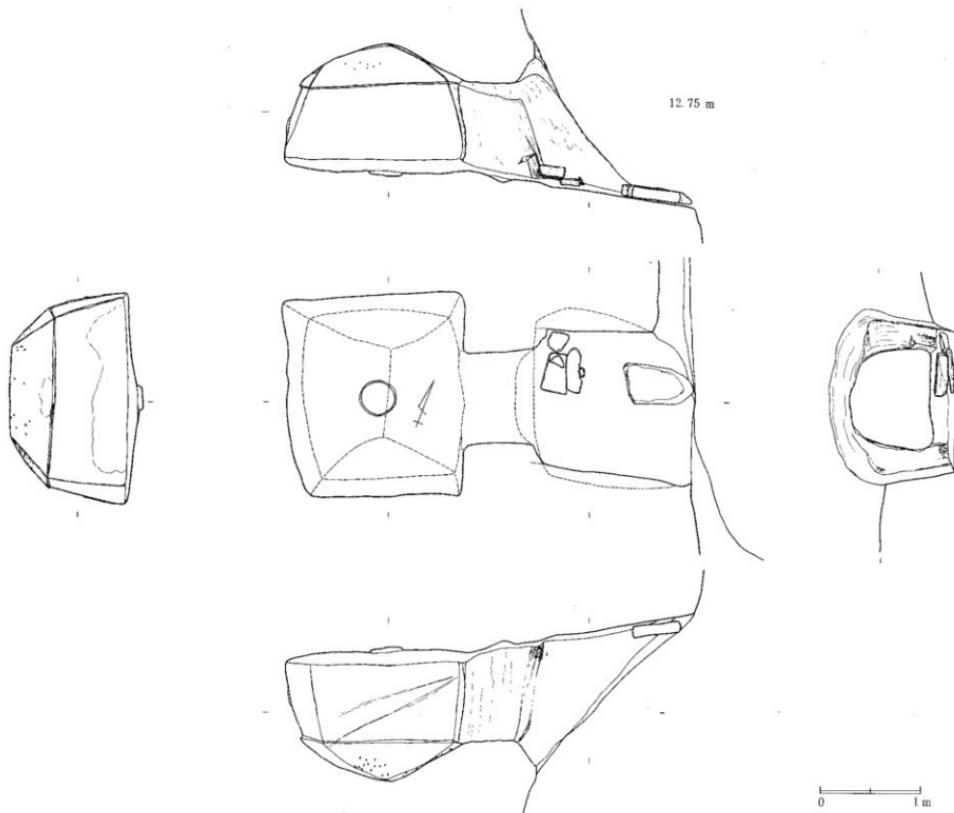


図5 隨音寺1号穴実測図

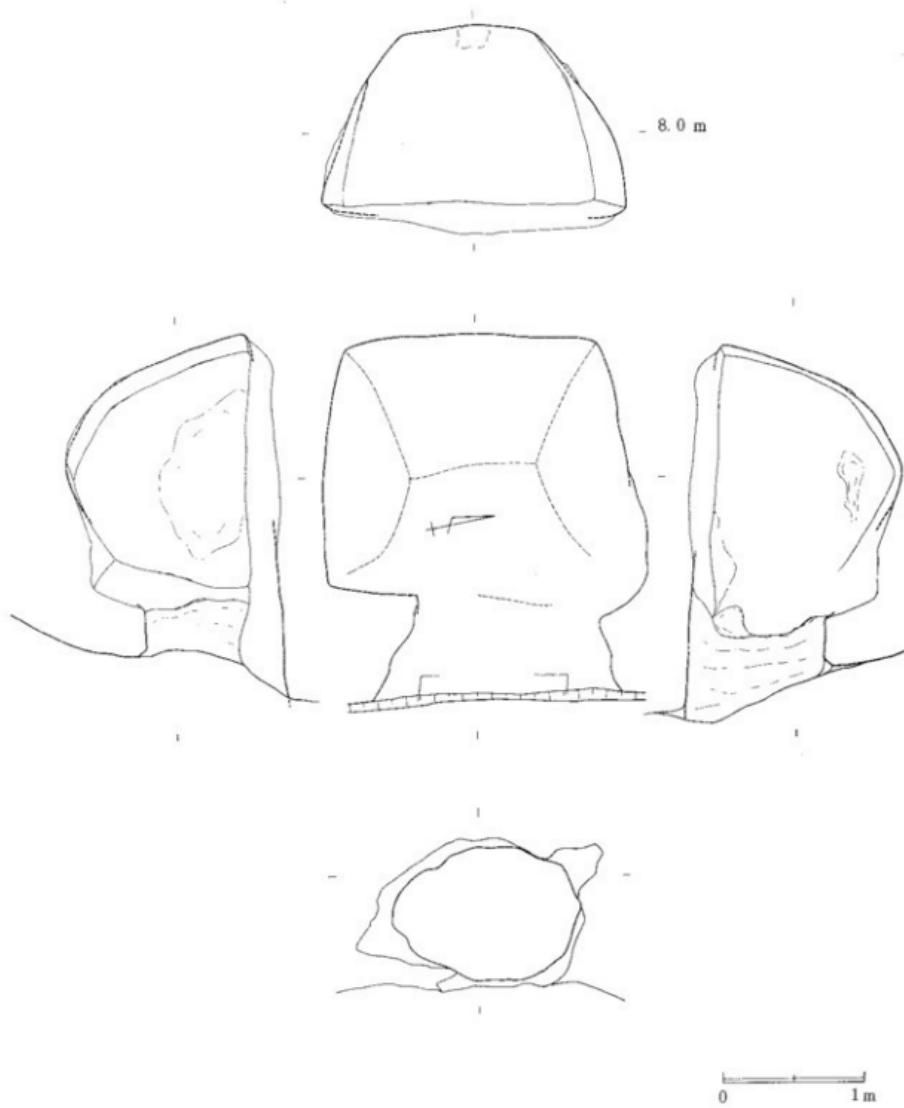


図6 随音寺2号穴実測図

IV 周辺の類例

隨音寺横穴群は岩盤に掘り込まれた横穴墓である。この岩盤に掘り込むということは単に泥質の山肌に掘り込むのとは異なる労力と技術が要求されたものと考えている。そこで、周囲にも同様の労力と技術を要した横穴墓が存在すると予想した。調査を行ったところ 1 穴など新たに発見されたので、觀音寺横穴としてここに紹介する。

觀音寺横穴

觀音寺横穴は宍道湖岸の 300 m 間に位置し、「出雲國風土記」に宍道川とみえる佐々布川の形成する谷をのぞんで立地する。この佐々布の谷は現在国道 54 号線が走っており古くより平野部から山間部へ向かう要衝の地であったと考えられ、宍道駅もこの付近にあったと推定されている。隨音寺横穴群は丘陵を隔てて約 1 km 北東に位置し、周囲には O M 横穴が同じ谷の南東約 500 m に位置し、遺跡等も周囲よりまばらにみられている。

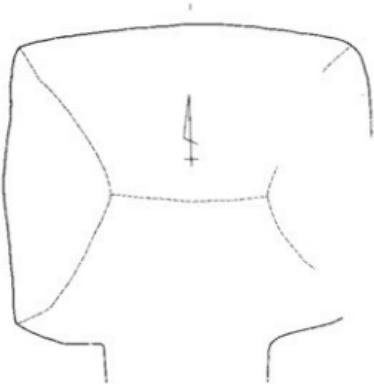
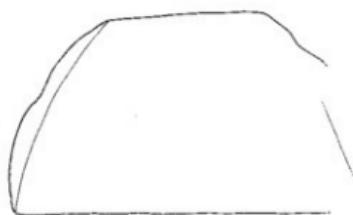
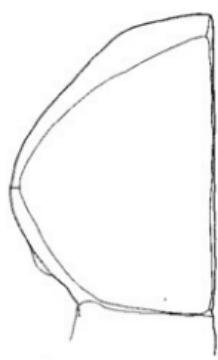
横穴墓は標高 2.0 ~ 3.0 m の丘陵岩盤に掘り込まれたものである。現状は東側の壁が破壊されており、そこから中に入ることができるが開口方向は S - 1° - W で佐々布の谷水田一帯を見おろすようになっている。横穴墓の性格からして周囲にも存在すると考え踏査を行ったが、現在のところ他の中には発見されていない。

玄室の床面はやや横長の長方形を示し、西側奥行 2.0 m、東側奥行 2.0 m、奥壁幅 2.4 m を測る。隨音寺 1 号穴、2 号穴よりやや大型のものであるがほぼ相似形である。壁から天井にかけては破壊された部分や剥落した部分がみられるが、天井と壁の間に界線がなく、三角形断面平入のものといえよう。床面から天井棟線までの高さ 1.4 ~ 1.5 m、棟線の長さ 1.1 m を測る。各壁は床面より 0.7 ~ 0.8 m までやや傾きながらのび、そこから天井棟線に向かって大きく内湾しながらのびる。岩盤に掘り込んではいるが加工痕などはみられなかった。

羨道には土砂が詰っており、剥落も大きく不明な点が多いが、玄室部分に接する羨道の幅 1.1 m、高さ 0.9 ~ 1.0 m を測る。

開口は古く、遺物は表採できなかった。

なお、島根県遺跡目録にみられる西来寺横穴群も岩盤に掘り込まれたもので、3 穴並んで存在する。しかし、これらはこの地域でみられる横穴墓の形態とは大きく異なり長方形プランで垂直な壁をもち、天井は丸形のもので、仏堂のような様相を示している。もともとは横穴墓であったものを加工したものである可能性もあるが、現状をみるとかぎり遺物もなく、横穴墓としての紹介は控えておく。



0 1 m

図7 観音寺横穴実測図

V 小 結

今回の調査で2穴の横穴墓を発掘調査し、若干の新知見も得られたので問題点も含めて述べていきたい。

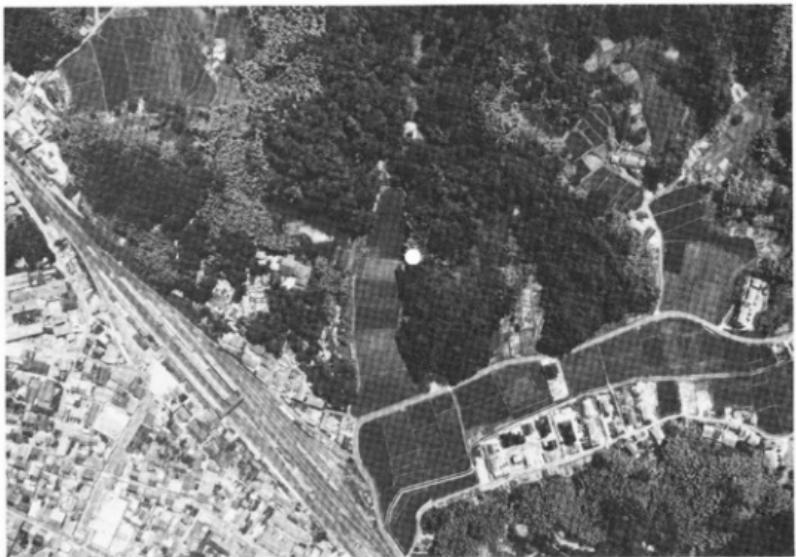
宍道町は布志名層、来待層の広がる地域で、岩盤の露頭が各地にみられている。隨音寺横穴群は、その岩盤に掘り込まれた横穴墓であることを特色とする。現在、町内では約40穴の横穴墓が知られているが、この中で明らかに岩盤に掘り込まれた横穴墓は今回紹介した3穴を数えるのみである。これは遺存状態が良いという反面、通常の横穴墓造営に比べて岩盤に掘り込むということに特別の労力と技術が要求されたためであろう。宍道町の来待を中心として分布する米待石は石室壇の用材として広く利用されており、石室造営のための工人集団が存在したと考えられるが、この石材加工の技術は隨音寺横穴群、觀音寺横穴にも利用されたと推定される。

次に形態をみると、横穴墓の天井形態は地域によって比較的特色をもつものであり、隨音寺横穴群をみると1号穴が整正家形平入、2号穴が三角形断面平入の横穴墓でいずれも平入である。ところが同じ才の谷に分布する才横穴群では丸天井、整正家形妻入、整正家形平入の横穴墓が知られており、整正家形妻入、三角形断面の多い出雲西部、奥部と整正家形平入、三角形断面平入の出雲東部との接点としての様相を示している。隨音寺横穴群の成立には様々な背景を考える必要があるものの、この地域間の接点としての環境の下で造営された横穴墓であると考えている。

注

- 1 「宍道町埋蔵文化財調査報告」4 宍道町教育委員会 1985年
- 2 「宍道町埋蔵文化財調査報告」2 宍道町教育委員会 1980年
- 3 「山陰本線玉造駅東・来待間線増工事に伴う埋蔵文化財調査報告」日本国有鉄道 1968年
- 4 注3に同じ
- 5 注1に同じ
- 6 注2に同じ
- 7 「松石古墳群」宍道町教育委員会
- 8 注2に同じ
- 9 注2に同じ
- 10 注2に同じ
- 11 注7に同じ
- 12 加藤義成『校注出雲風土記』1965年
- 13 「出雲国序跡発掘調査概報」松江市教育委員会 1970年
- 14 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の禪年試論」松江考古3 1980年
- 15 現在の来待石加工用具を図版6で紹介しておく。

図版 1



隨音寺横穴群周辺の航空写真（北西より）



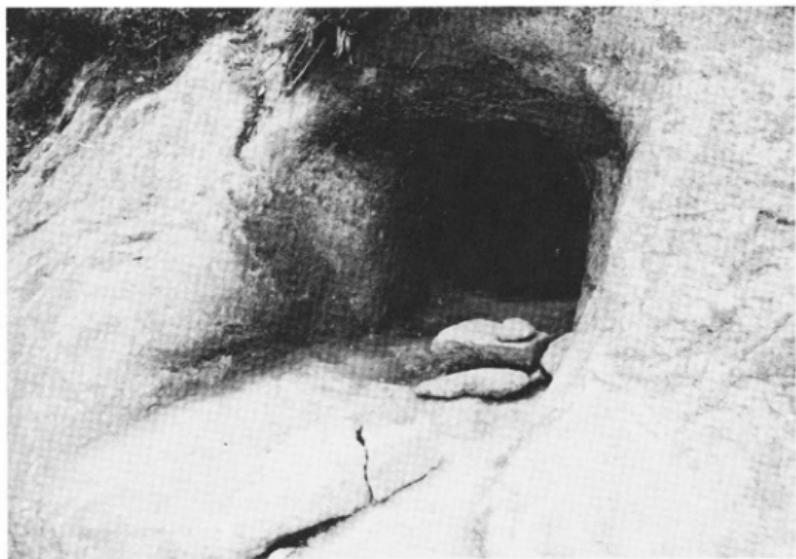
隨音寺横穴群遠景



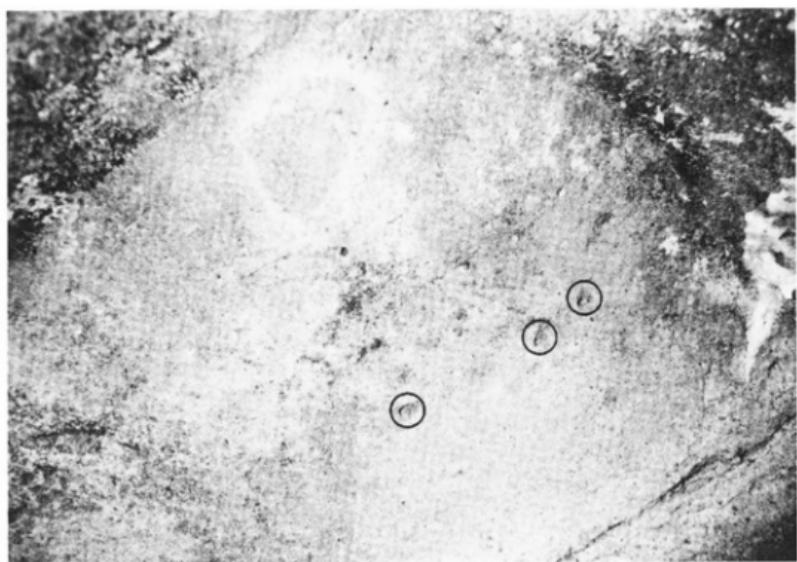
隨音寺横穴群近景



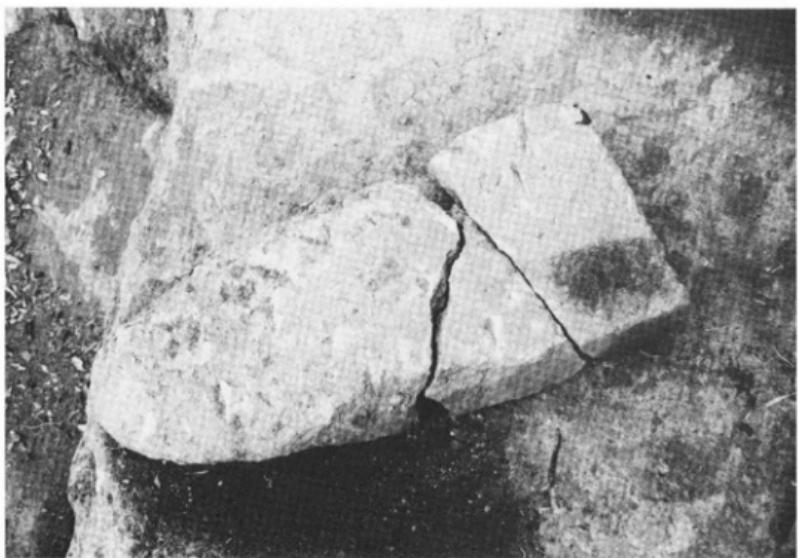
1号穴前景



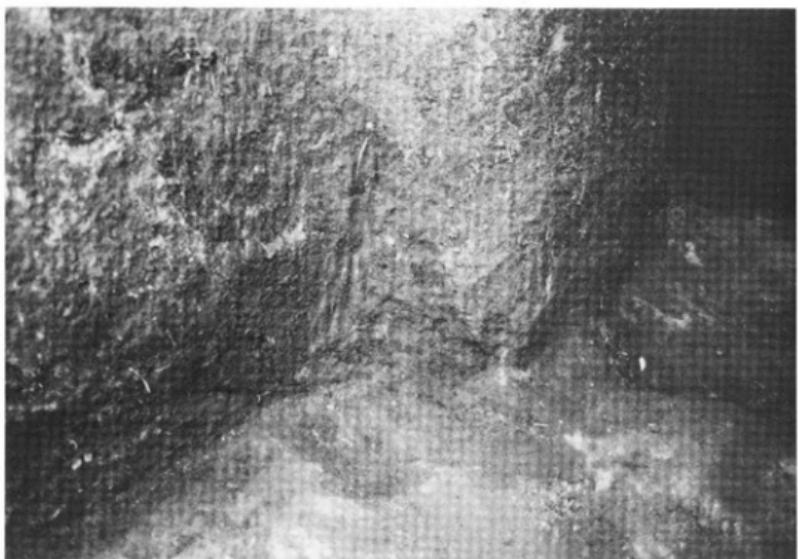
1号穴 前 景



1号穴玄室内加工状況（刺突状工具によるもの）



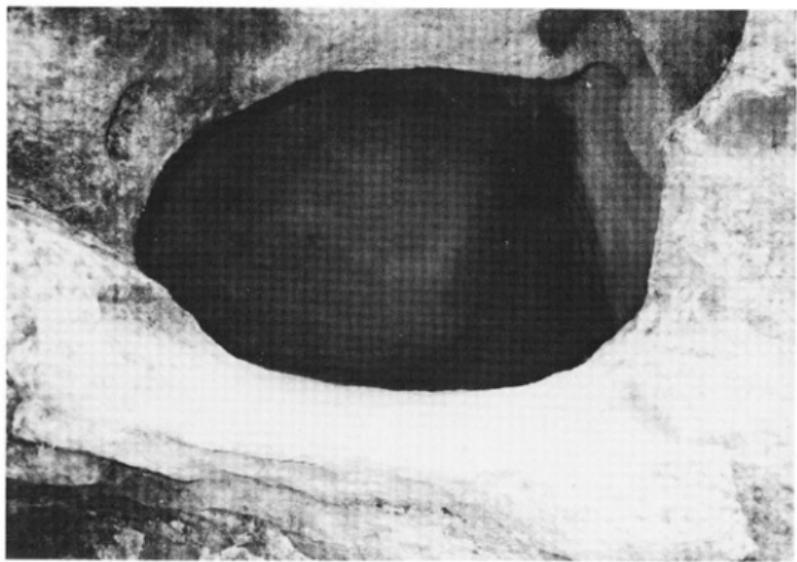
1号穴閉塞石（前庭部より）



1号穴閉塞部加工状況



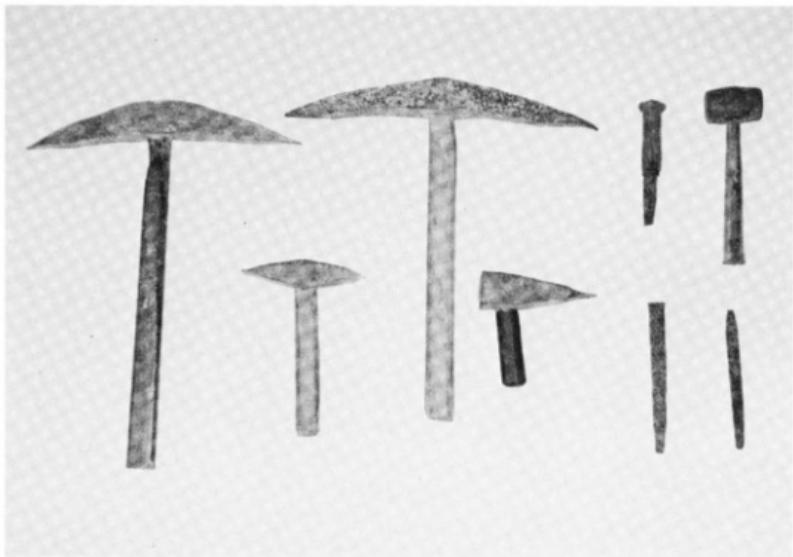
1号穴出土遺物



2号穴前景



般音寺横穴（東側より）



近年まで使用していた來待石加工用具

宍道町埋蔵文化財調査報告 5

昭和 61 年 3 月 15 日印刷

昭和 61 年 3 月 25 日発行

発 行 宍道町教育委員会
八束郡宍道町大字昭和 1

印 刷 松栄印刷有限会社
松江市西川津町 667-1